

# 50



第5巻第2号  
通巻第50号

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

投書・お問い合わせのE-mail : [colors@go-karasu.com](mailto:colors@go-karasu.com)

この半年ほど、北朝鮮がニュースで取り上げられない日はない。ワイドショーでも(ワイドショー的にはあるにせよ)脱北者が、金正日がどうしたこうした、と、それに対して、自称世界の警察が、それにぶら下がる金魚のフンがどうしたこうした、と、善くも悪くも喧しい。核爆弾から子ども向けアニメまで、拉致問題から喜び組まで、次から次へと話題が提供され、途切れることを知らない。すぐ近くにある国なのに、如何に私の知識が薄っぺらなものでしかなかったのか、と思わず知らされ、あまりに非現実的な現実にくらくらする。独裁国家ではこういいうことが罷り通るのだな、と。生き神が支配するところという国家を成立させることも不可能ではないのだな、と。

昨今では北朝鮮(とイラク)に矛先が集中しているけれど、このような体制が他に存在しなかったわけではない。近いところでは、チャウシェスク政権。細部には多くの違いがあるにせよ、大まかなところは似ていないとは言えないだろう。

あなたは他にはどんな国を思い出すだろうか。いろいろな時代のいろいろな国家が挙げられるだろうけれど、私たちが忘れてはならないのは、大日本帝国だろう。悪の化身の攻

撃に対抗すべく、北朝鮮が国民を教育・訓練するさまをテレビで眺めながら、ついこの間までは、日本だって、鬼畜米英を倒すために竹槍担いで教練を繰り返したんだよね、と。先程、「あまりに非現実的な現実」と書いたけれど、何のことはない、ほんの六十年も遡れば、日本だってそんな国だったわけである。テレビに登場する人々が、このことに触れようとしないのはなぜだろうか。戦略的な意図をもってのことか、はたまた記憶力が悪いだけなのか。

あなたは記憶を失くしたことがあるだろうか。泥酔昏迷したあげく、昨晚の記憶がない。そんな二日酔いの朝を迎えたことがある。酒呑みは少なからず。呑んだつもりで呑まれてしまう。そんな経験の一度や二度、否、三度や四度五度と……限りがないけれど、これが呑み助の性。目が覚めると、昨日はどうしたんだっけかな、と考えてみるものの、どうにもこうにも思い出せない。宿酔で参っているときには妙に気弱になっていて、何かとんでもない醜態を晒したのではないが、上司に暴言を吐いたりしていないだろうか、と気に病んでみたり。一晩の、ほ

(最終面に続く)

### 今日の紙面から

- 二画 オーラ面 (松本と話そう!ポンパン)
- 三画 芸術面 (レイズ・ギャラリー)
- 四画 からすライブラリー (CD『キリング・タイム』本『365デイズ』映画『十戒』)
- 五画 八面 (国際面) (ロンテンレポート)
- 六画 社会面 (やんひびの埋めます埋めます)



からす新聞は××××

が母体となって、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。

松本と話そう  
ポンポンパン

予備校で英語を教えるのを仕事として  
いるがこの時期は嬉しさと悲しさの両方  
を味わうことになる。「受験結果報告」  
だ。

よく質問にも来て、いろいろと相談に  
も乗り、親しみを覚えるようにもなり、  
さて、と首を長くしていても音沙汰な  
い。あとで第三者から合格の報告を受け  
る。

はつきりいつてほとんど印象もなくこ  
のままだともしかしたら特に思いつくこ  
となく終わっていたかも知れないのに、  
いきなり現れて、滑り止め以外ダメでし  
た、それでも自分は精一杯やれたと思っ  
し、短期間ではあるが教わったことに感  
謝してます、と直に報告を受ける。

なにがどうなりやこうなるんだらう、  
と思う。そして本当に成功しているのは  
後者だと思う。大学ではなかったが、こ  
の世には祝福されているんだと思う。そ  
してとても美しいと思う。もしかしたら  
これから先、一生会うこともないかもし  
れないが、生涯の友人になれたと思う。  
そして、さらなる成功を天に祈りたいと  
思う。

また、このときは「先生」なんて職業  
上、呼ばれ、気が付かぬうちに汚れ、肥  
大化していたころの皮の部分がいつき  
に剥げ落ちる瞬間でもある。自分の  
ちゃっちさを二〇くらいの子に目の当  
たりにさせられる瞬間。「先生」と「生  
徒」の関係が逆転する瞬間。そして、こ  
ういう子が一人でもいる可能性があるか  
ぎり、来年度こそはどんなにきつい時で  
も授業中、あるいは授業の予習に手を抜  
かないぞ、と誓いを立てる瞬間、なので  
ある。また、もし自分がこれから先、結  
婚でもするようなことがあって、子供で  
も授かるようなことでもあれば、「人か  
ら感謝されるような人間になれ。」では  
なくて、「人に感謝できるような人間にな  
れ。」と常々、背中で語ってやろうと妄  
想を抱く瞬間でもある。(きつとその子  
にはこういう父ちゃん母ちゃんがいるん  
だらうな。)

よく聞く言葉だが、「生かされている。」  
ということ。人生の折り返し地点でよう  
やくなんとなく実感できるようになっ  
た。そして、まだあと数年あるが、四〇  
歳になることがどうということなのかなん  
となく見えてきた。

一七歳の頃の自分に向かって「こう言っ  
てやろう。」「こういう落ちがあるんだ  
よ。」と。きつと聞こえてないけどね。

## 借金取り立て代行いたします

あなたの平穏な生活を  
脅かすストーカーを本  
場米国で培った最新の  
技術と装備を駆使して  
退治します。  
あなた一人で悩まない  
でください。

ストーカー  
バスター

相談無料

秘密厳守

防犯用品販売・  
防犯対策指導も  
致します。

tora@pda.co.jp

1843 N. Cherokee AVE: APT. #216

LosAngeles: CA 90028, USA

voice : +1-310-493-1001

facsimile : +1-323-466-5645

produced by

P.D.Agency

## Rei's Gallery



ロンドンパリへ行ってきました。  
この写真はロンドン「TATEモダン美術館」の美術館入り口にて撮影した作品。  
ヨーロッパの冬空は毎日ドンヨリ曇って寒くて悲しい気分させる分、街の建物や芸術品達が心癒してくれる。TATEモダンは現代美術の作品を展示していて、ドンヨリ気分をハッピーにさせる作品がたくさん並んでいた。私はこの入り口にあった馬鹿デカイオブジェが何より気に入って、ゾウの鼻に吸い込まれているかのように、どこからともなく人が美術館に集まってくる。そのオブジェがホース状だから、音が反響してゴォー低い音がする。これがまた巨大生物の呼吸みたいでおもしろい。  
日本の美術館にもこんなのがあったらいいのにな。そしたらもっと色んな人が美術館に寄って来て、面白い作品に出会えるのに。  
ただでさえ、現代美術ってムズカシイって言われちゃうんだから入り口に、ロダンの考える人もいいけど、ゾウとかパンダのような大きくて癒されるような作品が、どんと構えて待っていてくれたらな。

## Killing Time

Massacre

Recommended、1981年、  
B0000278VY

CDs

プレグレ畑からはフレッド・プリス、  
ニュー・ヨークのジャズ界隈からビル・ラ  
ズウェル、パンク/ニュー・ウェーブの裏  
通りからフレッド・マー。接点のなさそう  
な三人が組むことを提言したのがピーター・  
ブレグヴァド。こんな説明だけで喜ぶ人は  
喜ぶに違いない。

異なる世界を持つ三者がぶつかった結果  
例えば、フュージョンなどというどっちつ  
かずの混合物ができるのではなく、マサ  
カーは誰もが思いもしなかったような不思議  
なところへ飛んでいった。辿り着いたと

音楽で衝撃を受ける。ありそうでなかなか  
ないことだ。しかし、ありそうでなかなか  
ないことだ、という物言いではわかるよう  
に、全くないわけではない。私にとっては、  
このアルバムはそんな衝撃の一枚である。

ころには、身体ではなく脳みそが踊  
るような音楽があった。

(全太)



## EARTH FROM ABOVE 365DAYS

YANN ARTHUS-BERTRAND

ISBN 0810914301

Harry N Abramus, 2001年



Books

いつからか、わたしの周囲では「不気味」がゆっくりと流行りだ  
している。不気味といっても、単に悪いイメージのものではなく、  
頭の中の分析可能範囲を越えた先の“ような”感覚、「魅かれる。  
しかし具体的に其れの何にどう感じているかはわからない。何故か  
気になってしまう。」という感覚の物事に対して使っている“はず”  
である。……定義すらも曖昧なまま、なのだが。

『EARTH FROM ABOVE 365DAYS』は、そんなちょっとした不  
気味さが365日毎日分とはいわないが、それなりの濃度で詰まっ  
ている。単に上から撮っただけといえばそうなのだが、よくありが  
ちなキレイな写真ばかりでないのがよい。スケールが様々なもの、  
面白い。だけど、それには納まらない何かを感じてしまう。

この本をどう読むかは人それぞれ。まずは自分の誕生日から捲っ  
てみるってのはどうでしょうか。(と)



## 十戒

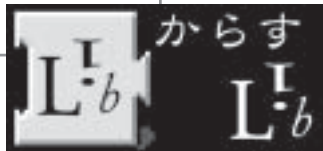
## The Ten Commandments

監督：セシル・B・デミル

出演：チャールトン・ヘストン

1956年公開(アメリカ)

DVD：CIC ビクター PDF-38

からす  
L-b

『ボウリング・フォー・コロンバイン』という映画が最近話題  
になっていくらしい。監督自らがハンデイクメラを担いで、さま  
ざまな人物にインタビューしまくって、アメリカ銃社会の矛盾を  
暴き出すというドキュメンタリー映画だという。

妄言得意の大統領を始めとして次々にやり玉に上がる肯定派の  
面々の筆頭格は、往年の銀幕スターにして全米屈指の圧力団体  
「全米ライフル協会」会長、チャールトン・ヘストンである。「罪  
は銃にあるのではない。それを使う人にあるのだ」。かねてより  
そう繰り返す彼の「功績」をもう一度振り返ってみるのも悪くは  
ないだろう。

誰の記憶にも残るのは『ベン・ハー』、『猿の惑星』も名作であ  
る。そして聖書を題材にした『十戒』の中で、ヘストンが演じた  
のは預言者モーセであった。神からの十戒を民衆に伝えた彼は、  
さらにこう付け加える。

神汝らを試みんため又その畏れを汝らの面のおきて汝らに  
罪をおかさざらしめんために臨みたまへるなり。

神に「試す」と言われても、「殺すなかれ」と戒め  
られても、それでも罪深き人間たちは殺戮をやめる  
ことはない。

武器という道具に責任を転嫁するなかれ、あなた  
自身が悔い改めなさいと、ヘストンもそう言いた  
いということか。

武装解除を表向き焦点とする戦争が近い。その  
前に、ユダヤ、キリスト、イスラム共通の聖典であ  
る旧約聖書の物語を、全米ライフル協会会長の案内  
で楽しんでみるというのも一興だろう。

(望月)



Films



ろんどん つうしん  
London Report

あんた誰？

何故かイギリスには、自分で勝手に大工やら修理屋などと名のついている様なやからが多い。とにかく仕事が下手。なつてない。プロとしてのプライドのかけらも感じられないのだ。ひどい場合はほとんど詐欺。と言うか、本当に詐欺師もいたりするから大変。我がフラットも自分が入る前に改装したらしいのだが、中東系の大工さん達ときたら、やっぱりダメ。あらが多い。パツと見は綺麗でいいのだが、それは壁を塗り替えたり、新しくフローリングにした所為であつて、決して彼らのおかげでは無いことは分かる程度なのだ。ドアがきちんと閉まらなかったり、ドアの下に三センチほどのすき間があったり、トイレの便座が上がらなかつたり、そのぐらいの事はもう既に大した事では無く、すつかりとイギリスに慣れてしまつてゐる。元からイギリス人であろうが外国人であろうが、仕事のない人達が大きに転向することは、よくある事として知つていたので、呆れはするものの、驚いたり出来な。結局、大家が大工を雇つてゐる都合上、自分で業者を選ぶことも出来ず、かと言つて大家に大工の質が悪いと文句を言つても面倒くさいので、「まあ、しょうがないか」と暮らす事になつてしまつのである。

しかし最近どうもボイラーの調子が悪く、シャワーを浴びてる時にお湯が出なくなつたりして最悪。ついでに雨漏りもしてきたり、ついに建物の入り口(建物には三つフラットが有り、その全体の入り口)のドアが壊れ

てしまい、事態はますます悪くなる一方。何が問題かと言うと入り口の鍵がかからないのだ。いわゆるオートロック式のドアなのだ。木製ドアの鍵が埋め込まれている部分があるポロポロ。個々のフラットの中には入れないものの、建物の中には鍵なしで侵入できしまふ状態。

すると、流石は治安が悪いと言われる Kingdoms Cross。何処からともなく怪しげな人達が入つて来る、来る。始めは一階に住む住人から「階段に注射器が落ちていた」とか、「見たこともない黒人が、中に居た」との話も聞いていたのだが、ついには彼らに遭遇することに。夜八時頃に帰つて来た時の話。建物のドアを開き、廊下の電気をつけ、中に入ろうとドアを押し開くと、開けたドアの後ろに背の高い黒人が。思わずハツと息をのみ、二秒ぐらい目が合つてしまつた。その後「こいつらか」と我に返り

「あんたここに住んでるの?」と、聞いてみると、「いや...、だたちよつと...」友達が...とか、なんだか煮え切らない返事。向こうに不法侵入という弱みがある所為なのか、ただ単にジャンキーと悪人とは結びつかないのか、ちよつとマゴマゴとした控えめな態度を自分よりも随分小さなアジア人に対して取るのは、興味深い。そんな事を思いつつも、話してても埒が明かないので、「どつでも言いけど、早く出ていってね」と言い残し、彼を後にして階段を上がろうとすると、後ろから呼び止められた。「俺だつて、人間なんだ!」「お前も外国人たる、分かるだろ!」「俺だつて人間なんだよ!」と、いきなり何の前触れもなく、明らかに同情を誘いたがつてゐる熱いセリフ。「何を言つてるんですか」と思いつつも、「はいはい」「つて言つつか、君のやつてる事には興味がないから、取りあえずここには長居しないでくれない」と言い聞かせ、

やつこのことで部屋まで帰り着きました。話には聞いていたものの、やっぱり結構ドキドキするもので、当然の様にすぐに大家に電話。流石にそんな状態では面倒くさいなんて言つてられず、入り口のドアを直してくれと伝えるとともに、ついでにボイラーと雨漏りの件も頼めたので、これはこれでいい機会だったのかな、と納得。その後ちよつと冷静になつて考えてみると、さっきの黒人は売人と待ち合せてたに違いなく、通報されるのをあれだけ避けたがつていたのも領けてしま

う。にしても、その後ドアが新しくなるまでの三日間にもう一度、違う黒人と遭遇し、他の住人も二、三回、黒人やら、娼婦を見かけてるんだから驚き。幾らここが治安が悪いからと言つても「何処で嗅ぎつけて、何処から湧いて出てくるんだらう?」と、思わず首をかしげてしまふ。中身の無いコンドームの袋が落ちていたのには、思わず笑つてしまつた。何はともあれ、そんな場面に遭遇しなくて本当によかつた。

(神山)



# ヤンヒポの埋めます・埋めます

ついに本人以下債務者の関連した人間に遭う時が来た。年の瀬が迫ろうとしているある晴れた日、少し早起きして金融屋スタイルに身を包む。DC系の黒いパンツに同じく黒いニットのシャツ。それに明るい茶色の革ジャケットを羽織る。もちろんジャケットの前は三分の一しか閉めない。さらに、金無垢の口レックスに十八金の亀甲ブレスレット、決め手は金縁フレームに薄く茶色が入った伊達眼鏡。どこからどうみても金融業者の出来上がり。さらに、満面の笑みを浮かべて明るく話す。これが金融の生きる道。

黒のトランザムを響かせて向かった先は金山の自宅だ。まずは自宅を急襲してプレッシャーを与える。出来れば自宅でぼつとしている所に行つて相手の隙をつくのだ。家族でも一緒なら尚更良い。手には家が踏んでも壊れない「ハリバートン」のアタッシュに、委任状を始め裁判記録やら過去の請求書等、自分が出向く事の正当性を証明する書類と、メモ、マイクロカセットレコーダーと隠し撮り用ペン型ボイスレコーダーが装備されている。余談だが、最近のスパイアイテムは性能が良くなつていて、胸の内ポケットにさしておいても普通の会話ならデジタルで大変クリアに録音が出来ると。しかも、四時間ぐらいい一度に録音できるのだから大したものだ。

午前八時過ぎ、自宅の前を車で通過する。前回の下見と特に変わった様子は無い。少し先で車を止め、今度は徒歩で家の様子を見る。明らかに電気がついているので誰か

は在宅中だ。念のため、シャッターのすき間から自家用車も視認した。そのまま車へ戻り、近くのコインパークを探す。実際、事が動き出したらどのくらいの時間がかかるか解らないので、路上駐車は危険なのだ。さらに、警察が介入した場合も痛い腹を探られかねない。最近住宅街にも結構コインパークがあるので、見つけるのは苦勞はいらなかった。車から象のアタッシュケースと、隠し撮り用ボイスレコーダーを準備して金山邸の玄関を目指す。門柱まで来ると、どこにもあるインターフォンがあるので、軽く押してみたところ、

ヤ：「ピンポン」  
 声：「はい、どちらさん？」  
 (年配の女性の声だ。多分金山の連れ合いだろう。)

ヤ：「あ、私、P・D・Agencyのモノですが  
 金山さんはご在宅でしょうか」  
 声：「どんなご用ですか」

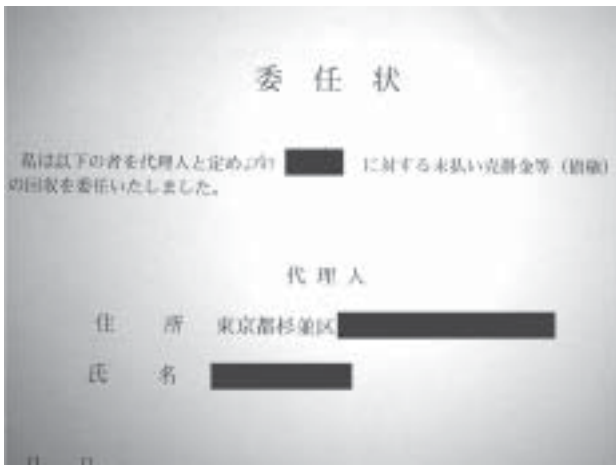
(シメタ)  
 ヤ：「いや、実は、株式会社アバンギルドさんからの依頼で支払いのお願いにまわりました」  
 声：「……………」  
 (少し間があつて、玄関の扉が開いた。ずいぶんガードが甘いものだ)

声：「なんの支払いですって？」  
 ヤ：「はい、実はアバンギルドという会社から依頼を受けて、金山さんにお支払

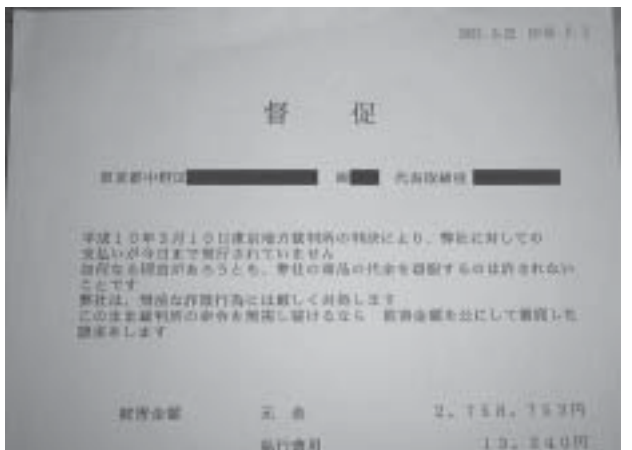
いのお願いに来たんですよ」  
 声：「どついつ事？」  
 ヤ：「いや、ですから金山さんに支払い義務のある債務を回収にまいりました」

(すると、門を開いて玄関口に招き入れられた)  
 声：「オタク、どちらさんとおっしゃった？」  
 ヤ：「P・D・Agencyのヤンヒポと申します。」  
 声：「アバンギルドの方じゃないの？」  
 ヤ：「いえ、債券回収業者です」  
 声：「何か書類とか持つてるの？」  
 ヤ：「もちろんです」

(おもむろに、委任状を取り出し提示する)



声：「ああ、そう。で、なんの債務なのよ」  
 ヤ：「はい、平成九年一二月の裁判で支払い命令の出ている一件です」



声：「裁判？」  
 ヤ：「はい、そうですよ」  
 声：「誰が裁判したの？」  
 ヤ：「アバンギルドが優音の金山さんを民事で訴えた件です」  
 声：「なんの事？ 何か記録でもあるの？」  
 (あれ、ひよつとして裁判の事知らないわけ？)

ヤ：「失礼ですが、金山ちづさんですよ」  
 声：「なんであたしの名前知ってるのよ」  
 ヤ：「いえね、下調べは済ませてありますから」  
 声：「なんかいやねえ」  
 ヤ：「これが裁判の記録と判決文です」

(小冊子になっている判決文を渡す)  
 (最終面に続く)

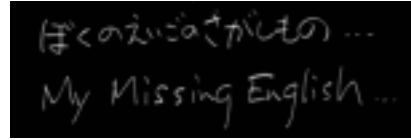
# Die, or Pass Away.

It's come out...

「出てきたわね・・・」

Yes. It's emerged....

「ええ、現れ出でたわ・・・」



学校英語にわすれものありませんか？

He died... He passed away.

「彼は死んだ・・・」

彼は逝ってしまった」



受験によくある問題。

以下の二つの文がほぼ同じ意味になるように、空欄に適語を入れよ。

Never put off till tommorow what you can do today.

Never ( ) till tommorow what you can do today.

「今日できることを明日に延ばすな」

答えは postpone。postpone = put off 「～を延期する、延ばす」だからである。

しかし、問題にも「ほぼ」とあるように、本当のことを言えば、これら二つはまったく同じではない。比較的 postpone は「堅く」、put off は「砕けた」表現なのである。これは日本語に置き換えれば、「延期する」と「延ばす」の違いに近い。我々日本人にとってもそれら二つは「ほぼ同じ」だが、ちゃんと使い分けをしている。

語源で言えば、前者が比較的新しいラテン系、後者が古くからあるアングロ＝サクソン系。そもそもフランス経由で後から入ってきたラテン系の言葉には、堅いイメージの言葉が多い。

このパターンはなかなか多くて、

emerge 「出現する」 come out 「現れる」

respect 「尊敬する」 look up to 「仰ぎ見る」

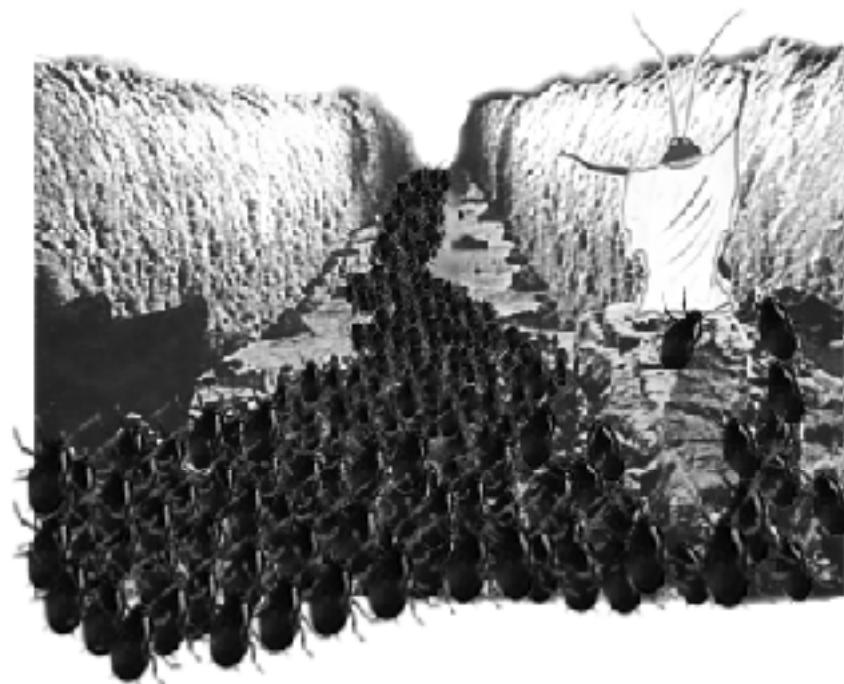
experience 「経験する」 go through 「やってみる」

などなどなどなど、例を挙げればきりが無い。受験を経験した人にはうんざりした覚えがあるだろう。

ちなみに、この手の類義語がすべて「堅い 砕けた」「ラテン アングロ＝サクソン」というわけではない。

die と pass away の場合は、die (一般的な「死ぬ」)、pass away (直接的な「死ぬ」を避けた婉曲的な言い方) の違いである。語源的には、die (デンマーク)、pass (ラテン) である。

ところで、put off は、put (置く) と off (離れて) の組み合わせであり、「(当初予定した日時から) 離れた(ところに予定を移し替えて) 置く」という感じで、わかりやすくイメージしやすい感覚的な表現である。pass away 「亡くなる」などもその典型的な例と言える。pass (通り過ぎる) と away (あちらへ) の組み合わせは、「逝く」に近い感じがする表現である。(望月)



Do not be afraid! See the salvation of the Lord, which He will accomplish for you.

「恐れるでない！主があなたの方のために為される救いを見るのだ」

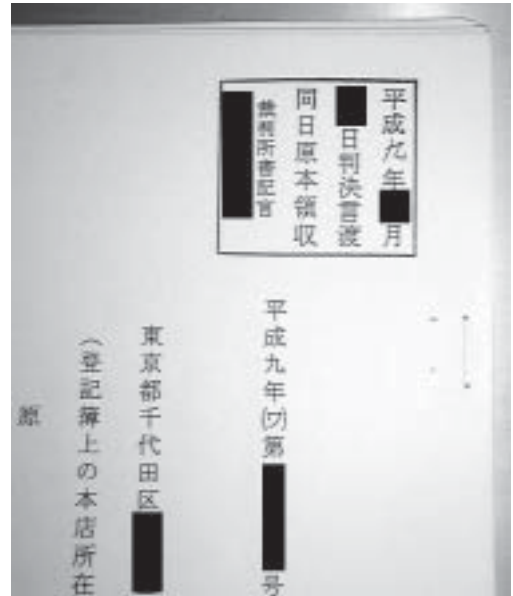
『旧約聖書』(新欽定訳) 出エジプト記 第15章 14節より  
The Bible "New King James Version" Exodus Chapter 15:14  
accomplish = 成し遂げる

He carried it out!

「神さまやった！」

carry out = 成し遂げる

(六面から続く)



平成九年 月  
 日判決言渡  
 同日原本領収  
 裁判所書記官

平成九年(初)第...号  
 東京都千代田区  
 (登記簿上の本店所在  
 所)

(一面から続く)

んの数時間の記憶を失くしただけで、何とはなしに過る不安。体験した人なら感ずるところがあるのではあるまいか。

私が経験したのは、逆行性健忘症というものの。かれこれ二十年も前の話である。バイクの事故で頭を強打した結果、事故以後の数日間の記憶が曖昧(あいまい)になってしまっただけでなく、事故以前の一週間ほどの記憶がすっぽり消えてなくなってしまったのである。考えてみれば、都合十日以上も記憶が滅茶苦茶になつてしまつたのだが、実際のところ、生活に直接的な影響があるわけではない。困ることなど何もない。しかしながら、考えるところは少なくない。簡単に言つてしまえば、記憶がない間の私は、存在しなかつたのではないか、というようないや、もちろん、物質的には存在していたのだから、その間に出席した人々にとつても、私が存在していたに

声：「なんの事だかさつぱりわからないのよ、こんなもの見たのも初めてだし」  
 ヤ：「そうなんですわ、でもここに書いてあるでしょ、この金額を支払えつて」

声：「今、主人はいないのよ。今日は病院の定期検診の日だから……」

ヤ：「そうですか、何時頃お帰りですか」

声：「多分遅くなりますわね」

ヤ：「それじゃあ、外で待たせてもらいます」

声：「そつ、外つてどこで……」

ヤ：「ええ、表で待たせてもらいます」

声：「いや、遅くなりますから……」

ヤ：「結構ですよ」

声：「それは、困ります。近所の手前もあ

る」

ヤ：「こちらも、仕事ですから」  
 声：「困りますよ、帰ったら電話させますから」

ヤ：「こちらも電話を待つてたんちゃ、仕事になりませんか……」

声：「本当に電話させますから……」

ヤ：「でも、お話だけで本当にお留守かも自分にはわかりませんかねえ」

声：「私がつそいつて言つて言つてですか」

ヤ：「私は、本当にお留守か確認しようがありませんからねえ」

声：「お願いしますから、帰ってください」

(ほとんど逆ギレの状態)

さて、この続きはいつたいどうなるのか……。

違いない。けれども、私にとってはその十日間は存在してないのである。例えば、その十日間にだけ出会つた相手があつたとして、その人は私にとっては存在しないわけで、そう考えると、その期間に読んだ本、観た映画、そんな種々も存在しないことになる。空つぽの十日間、私は存在したと言えるだろうか。

人の生が瞬間の積み重ねであるのは自明のこと。一秒一秒を生きていくことが生というものだ。だからといって、今、この瞬間だけが人を人としているわけではない。この瞬間に私が何かを感じたり、考えたりするのは、それ以前の記憶があるからである。動物的な本能に依存する部分は、記憶に依拠することなく成立するのだから、それ以外のあらゆることに閉じては、どうだろう。記憶がなければ、思考を、文章を構成

することなどできないし、そもそも、目の前にある紙と手の中の万年筆が何をするための道具なのかさえないだろう。あなたをあなただと認識することもない。私が何者でどこから来てどこへ行くのか、などという問いも無用だ。記憶があるからこそ、未来を思い浮かべることができるのだし、おかげで夢を見られるのだし。

極論すれば、記憶がなければ、ヒトは人間ではないのだ、と断言したい私がここに

六十年代に生まれた私には大日本帝国の直接的な記憶はない。けれども、そんな時代があり、そこではどんなことがあつたのかを心にとどめ、次の世代にも渡していかないと、と。北朝鮮のニュースを眺めながらそんなことを思う生温い冬の朝である。

(全太)



Ken-ichi Shinozaki,  
 architect

Voice : +81-3-3220-0644  
 Facsimile : +81-3-3220-0640;  
 e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp  
 篠崎健一アトリエ

編集後記  
 からす新聞第五巻第一号(通巻第五〇号)無事、発行できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発行予定日は二〇〇三年三月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾

**アリス**

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号  
 03-3379-1451

宝仙寺  
 ファミマ  
 おうめかいどう  
 中野坂上駅

**アリス**